

タイトル: Back to the Future

◆シナリオ概要

プレイ人数3~5人を想定した現代シナリオです。
今作のシナリオは全2話のキャンペーンシナリオの2作目です。
プレイ時間は4~6時間を想定してます。
このキャンペーンは継続探索者ではなく、ハンドアウトに沿ったPCを作ってもらう事になります。
なお、このシナリオにおいての正気度判定は5~6回想定です。

◆あらすじ

探索者達のせいで邪神が復活してしまう。
リアルに戻ってきた探索者達は運営会社から手紙が届く。
内容はニャルラトテップを生んでくれて感謝する。
これで世界に魅力的なトリックスターが誕生したと書かれている。
そして世界中で奇妙な事件が起こり始めたのだ。
それはこの世界に邪神と呼ばれるもの達が世界の裏で誕生してしまった事を意味する。
探索者達はそれが自分達に責任があると思い、沖縄にある運営会社に向かう。
そこには一冊の魔導書と大がかりな量子コンピュータが置いてあるのだった。
探索者達はコネを使い、マッドサイエンティストである人物に接触する。
彼はフィラデルフィア事件の原理を魔術とスパコンによる演算を用いて方向性を持たせタイムスリップをすることを提案する。
そこで彼はクトゥルフ神話の生みの親であるラブ・クラフトを殺害すれば良いと告げる。
そうでなくても彼の作品が世に出なければ歴史は変わるのではないかと告げる。
ただしその影響がどのように出るかは分からない。それでも良いのであれば協力すると告げられる。
探索者達はそれに従いタイムスリップを試みる。
膨大な電力を魔術と演算にて方向性を持たせ探索者達はタイムスリップを行う。
時空を渡りたどり着いた草原で探索者はティンダロスの猟犬と出会う。
何とか逃げることに成功した探索者達はラブクラフトの住む家にたどり着く。
探索者達はそこで3歳の少年であったラブクラフトに恐ろしい世界観の小説を執筆しないように頼む。
しかしそこでまたしてもティンダロスの猟犬と遭遇してしまい、ラブクラフトは一時的狂気に苛まれる。
追い払うか逃げるかした探索者達は一人の男と出会う。
その男は自らをオーガスターレスと名乗る。
彼はラブクラフトに狂気を与えてくれてありがとうと笑う。
明日またさっきの草原で会おうと彼はその場で文字通りに消えてしまう。
探索者達はそこで選択を迫られる。
ラブクラフトを殺すか否かである。
★殺した場合
そこで探索者達は昏倒して気づけば部室で目が覚める。
自分達がタイムスリップした事実は周囲の人間から消えている。
ふと見ると三笠桃が本を読んでいる。
その本のタイトルは邪神の胎動というタイトルである。

中身を見て見るとそこにはアーカムオンラインというVRMMOPRGに挑むサークルメンバー達が描かれている。

早く探索者達は眩暈を抑えながらページを捲っていくと最後にはラブクラフトを殺しているのだった。

桃は言う。

「その本面白いですよ。まるで皆さんが物語の登場人物になったみたいでとても親近感が沸きます」

★殺さない場合

次の日に草原でオーガスターレスと出会う。

彼は探索者達に再度礼を言う。

「君達のおかげで彼の神話体系は本物になった。師からから弟子へ。夢から現へ。嘘から真へ。創作から神話へと昇華したのだ。さあ君達へ礼をせねばなるまいな」

彼はそういうと傍らにニャラトテップを呼び出すと笑う。

「君達はこれが居ない世界を望んでいたのだろうか？ ならばこのような世界はどうだろうか。君達はこういうのが好きなのだろうか？」

そういうとダーレスは指を鳴らす。

「はい、というわけで今回のシナリオはここで終了です」

と(KP名)は言った。

「お疲れ様です～」

(PC1.2.3名)はそう言った。

舞台を変えて君達の遊戯は続いていくことだろう。

◆ハンドアウト

ハンドアウトPC1

コネクション: 三笠桃

関係: 愛情

貴方は三笠に好意を寄せている。彼女と過ごす日々は貴方にとってかけがえのないものだ。

アーカムオンラインをクリアした貴方は帰宅後に三笠と電話していた。

色々な事が起きて疲れていた貴方にとって、それはかけがえのない時間だったのだが突然三笠は悲鳴を上げる。

彼女は化け物が目の前に居ると告げるのであった。

ハンドアウトPC2

コネクション: マッド

関係: 友人

コンピュータについて困ったらいつでも呼んでくださいwwww

いつでもヘルプに参りますぞwwwww

マッドと呼ばれる如何にもな人間とは、何故か貴方はウマが合った。

貴方はこの事件について関わろうと決めた際、彼の事が脳裏によぎったのだった。

ハンドアウトPC3

コネクション: 自称霊能力者、神威多美子(かむいたみこ)

関係: 同級生

世の中で可笑しいことが起こるようになってしまったのは自分の事かもしれない。
そう思い悩んだ貴方は別のサークルに痛子というあだ名で呼ばれる女性にオカルト関係の事で悩んでいたら相談してくださいと言われたのを思い出した。
何だか胡散臭いが邪神というのも胡散臭い。
オカルト関係で悩んだら相談しても良いかもしれないと貴方は思い始めた。

ハンドアウトPC4

コネクション:ニャルラトテップ

関係:興味

無事にアーカムオンラインをクリアした貴方だったが、一つだけ分からない事があった。
それは復活させたニャルラトテップという邪神の存在である。
オカルトに詳しくクトゥルフ神話にもそれなりに造詣がある貴方でも、その邪神の事は分からなかった。
貴方はニャルラトテップという邪神を詳しく知りたいと思っている。

◆アーティファクト・魔導書

<時間の跳躍>

魔導書。オリジナル。

ラテン語で書かれている本。

本というが八折判の薄いもの。

解読することで並列化した時の世界への跳躍の仕組みを知る。

ただ知るだけで実行はできない。

解読できなくても見るだけで脳がこれを拒絶する為、吐き気を覚え、正気度判定が起きる(1/1D4)

解読できた場合も同様に正気度判定(1D3/1D6)

この正気度の喪失は写本についても同様である。

<量子コンピュータ>

アーティファクト。オリジナル。

アーカムオンラインの運営に使っていたと思われるコンピュータ。

ゲーム自体のデータはこのPCを使うまでもない程に小さいものである。

このPCは時間の方向性を計算する為に使われる。

◆シナリオ進行

夕暮れの邂逅

部室

沖縄

仲間の力

時間の跳躍

猟犬との遭遇

◆セッション開始前に伝える事

探索者達がアーカムオンラインをクリアしてから、世の中で様々な事件が起こるようになっていた。

具体的に言えば神隠しや猟奇殺人がニュースで頻繁に取り上げられるようになったのだ。あとハンドアウトが存在するのでそれをうまく利用してプレイしてほしいと伝えること。

◆夕暮れの邂逅

放課後にPC1が三笠と一緒に下校するシーンである。

PC1は三笠に好意を寄せているという事前にハンドアウトを渡しているの少しばかりRPの時間をとってもいいだろう。

シーンをPCの部屋に移した後、三笠と電話しているシーンである。

彼女は突然に悲鳴を上げてPC1に助けを求める。

「助けてください！ 目の前に化け物が居ます！」

彼女は泣き叫んでいる。部屋の壁に何かがつぶれる音がする。きっと三笠が手あたり次第にものを投げているのだろう。携帯も床に落としたのかもしれない。少しだけ彼女の叫び声が遠い。

「あっ、せ、先輩……」

彼女の声が急に近くに聞こえた。彼女が床に落ちている携帯を拾い上げたのだろう。

「先輩、私、いま食べられちゃってます。痛いんです。痛いし怖いよお……」

彼女はPC1に自分が食べられていく瞬間を教えてくれる。

「もう……痛みも、感じません。先輩、最後に、私……わたし、先輩のこと……す……」

そう言うと三笠は死亡してしまう。

このシーンはロシアで熊に食べられている瞬間を実況した女性というニュースを参考にすればいいだろう。なお、刺激が強いので閲覧は自己責任で。

その電話が終わったら正気度判定を行う。(1/1D4+1)

実際にその現場に行くとそこには食事を終えたグールが居るだろう。

探索者の姿を見ると逃げてしまうが演出で仇を取らせてもよい。その場合は判定せずにグールを殺すことができるが、グールを目撃した分の正気度の喪失が発生する。

◆部室

三笠の葬儀が終わってしばらくした後の部室である。

探索者は全員登場。そこに須藤が入室する。彼はとても疲れている様子だ。

サークル活動するの雰囲気じゃないのか、他の部員達もすぐに帰ってしまい、探索者と須藤だけになる。

「すまない」

彼は開口一番にこう告げる。

不気味なゲームだと分かっていたのだからすぐに止めれば良かったと。

彼はテーブルに一つの手紙を出す。差出元はアーカムハウス日本支社となっている。

ネットなどで調べればそれが沖縄にあることがわかるだろう。

手紙の内容は

「ニャルラトテップを生んでくれて感謝する。これで世界に魅力的なトリックスターが誕生した」と書かれている。

この手紙は既に開封されており、須藤はこの中身を見たのだろうと探索者達は分かっている。

彼は何かを決心したように探索者達に話しかける。

「僕はこれからそのアーカムハウスの沖縄支社に行ってみようと思う」

彼の心情としては、アーカムオンラインをクリアしたことで今世界中で不思議なことが起こり始めていると思っている。

それを指摘しても「我ながら中二っぽい発想だと思っているけれど、三笠さんの件があるから、自分の納得いくまで何かをしていないとどうしても気がおかしくなってしまうようになるんだ。だって君達は僕の為にあのゲームをクリアしてくれたんだから。可愛い後輩達がこの世界中の混乱と無関係だって証明したいんだ。いや、そうやって逃げないとやってらんなくてね」と自嘲気味に笑う。

探索者達がそこで乗ってこないのであれば、須藤は探索者達と一緒に誘うだろう。沖縄で気分転換でもと。

◆沖縄

アーカムハウス日本支社の所在は本土から少し離れた無人島である。

地元の漁師に送迎を頼むと少し不信がりながらも引き受けてくれるだろう。

ここでは自由に買い物などをして良い。探索者達は大学生だが、1000万の賞金を得ている。聞き込み等をするのであれば以下のことがわかる。

- 1: 島には白衣を着た研究者らしき人物を時折渡していた。食料などを調達していたようだ。
- 2: 一度だけ大きな船が島について何やら大掛かりな搬入作業を行っていた。
- 3: 今は誰も居ないはず
- 4: 島は歩いて10分も掛からずに一周できるほどの大きさである。

漁師に協力してもらうことで島に渡ることができる。

そこには白い建物があり表札にはアーカムハウス日本支社と書かれている。

窓などは存在しており、覗いてみるのであればどうやら二部屋程あるのがわかる。

鍵開けや窓を割るなどの方法で侵入した場合、特に判定なく侵入することができる。

施設内には大部屋と小部屋の二つがある。

★小部屋の方は資料室になっており、そこには量子コンピュータの扱いについて書かれているマニュアルが置いてある。

更に<図書館>に成功した場合は本棚にクリップ止めされたA4用紙の束が入っているのがわかる。

<ラテン語>に成功した場合、それは時間の跳躍と書いてある事がわかる。なおこの用紙の束は大部屋にある魔導書の写し。写本である。

★大部屋に入った場合、そこは非常に大きな音で探索者達を出迎えることになる。

その音の正体は放電である。

部屋にはまず大きなガラスの球体があり、それから伸びるように木製の簡易な階段が伸びている。その階段は飛行機などに使われるような取り外して移動させることができるようなものだ。

ガラスの球体自体は鉄柱の上に置かれている。

そしてそのガラス球を取り囲むように円状にコイルがまかれていることがわかる。そのコイルからおびただしい量の電気が放電しているのだ。

<電子工学>に成功すればそれが巨大なテラス・コイルだということが分かるだろう。

なお、この<電子工学>に失敗した場合はあまりの迫力に正気度判定が行われる(0/1)。

次に探索者達が気づくのは強烈な冷気である。部屋全体が極度の冷気に満ちているのだ。

KPは長い時間この場で探索することはできなそうにないと告げること。

防寒着などを持っていれば大丈夫だろう。

周囲には大きなサーバーがいくつも乱立しており、部屋の角は凍り付いている。
ちなみにサーバーは稼働していることがわかる。
ガラスの球体を調べるのであれば、多少近づくことでその中に一冊の本が置かれていることがわかるだろう。階段を登りガラスの球体に入ることでもその本を手にとることができる。
それにはラテン語で時間の跳躍と書かれている。この写本は同施設の資料室にある。
〈目星〉に成功すれば、部屋の隅にガラスの蓋があることが分かる。
サーバーを調べるのであれば〈電子工学〉〈コンピュータ〉で判定する。
技能に成功したのであれば、これはもしかしたら量子コンピュータなのではないかと思う。ただし量子コンピュータはまだ現在作ることができない技術のものであると探索者は知っていても良い。どちらにせよ普通のスパコンではないということは明白である。
これ以上詳しく調べる為にはそれぞれのハンドアウトに書かれた人物への接触が必要である。

◆仲間の力

痛子とマッドを沖繩に呼ぶ場合はそれぞれ量子コンピュータや魔導書などの単語を出せば興味を持ってくれることだろう。
他の方法についてはKPに対処してもらうことになるが、基本は現地に呼び出してもらったほうが処理は楽だろうと思われる。
二人にそれぞれコンピュータと魔導書を見せると少し時間が欲しいと言われる。
そして適当なタイミングで二人はそれぞれのアイテムについての情報を出すだろう。
二つの用途を聞いて探索者が思いつかない場合は、須藤がこれで時間旅行できるかもしれないねと発言する。
それに最初こそマッドと痛子はおどけて笑うが、須藤が本気な様子だったので次第に笑い声が小さくなっていく。
とりあえず今日の所は解散することになる。
本土に行き適当な宿を取るか現地に泊まるかした夜に、須藤は探索者達に問いかける。
これは発言の例である。KPは相手の相槌等を加味したうえで会話をすること。
内容自体は二つのアイテムを使ってタイムスリップすれば三笠を救えるかもしれない。
そしてその方法はクトゥルフ神話の原作者ラブクラフトを殺すことだと。

★会話例

「あのコンピュータと本があれば三笠さんを救えるかもしれない」
「君たちはどうすれば現状を変えられると思う？ この滅茶苦茶になってしまった世界を」
「もっと根本的なことさ。あのゲームをクリアしないとかじゃない。そもそもあのゲームはクトゥルフ神話を題材にしたゲームなんだろう？」
「このサーバーを壊しても意味がない。もっと根本的なことだ。そう。クトゥルフ神話なんてエンターテイメントがなければいい。あの邪神はそれから生まれたんだからね」
「そう。僕たちの手でクトゥルフ神話の原作者、ラブクラフトを殺すんだ」
「もちろん、執筆できない状況にできれば殺す必要はないけれど、未来を変えたいのであれば、より確実な方が良くと思う」
等である。なお、これは実際にテストプレイで行われたやりとりを参照にしている。
須藤は考えてみてくれと言い残し、痛子とマッドの元に向かう。

◆時間の跳躍

次の日になり、施設に向かう。
無論この前に買い物などを挟んでもいいだろう。

施設の大部屋では須藤と痛子、マッドが何やら相談している。
時間の跳躍に関しての相談をしているのだ。
話しかければいつでも跳躍は可能だとの事。
戻ってくる手段に関しては、三人は何も言わない。
問い詰めればこの時間旅行は一方通行なのだという返事が返ってくる。
だからこそ、行くか行かないかは各自の自由と告げる。
まあ、どの道行ってもらわなければ話が進まないでKPはその通りに誘導すること。
使い切りキャラクターなので大丈夫だとは思いますが、もしも何かあるようだったら、須藤をそのままのステータスで貸し与えること。
セッション前に事前に説明しておくと思われる。
探索者達が納得した上でガラス球の中に乗り込み、最後に須藤が球体に入るとマッドがガラス球の蓋を付ける。
そしてしばらくすると探索者達の周囲には強烈な放電が起きる。
下で痛子が本を開き詠唱を始めると、探索者達の視界は白く染まっていく。

◆ 猟犬との遭遇

次に探索者達が目を覚ますと、そこは草原であった。
ガラス球から探索者達が出ると、気持ちの良い風が頬を撫ぜるだろう。
須藤が出てきて周囲を見渡すとある一点を指刺す。
「ほら、あの町がラブクラフトが生まれたロードアイランド州プロヴィデンスだよ。彼は今頃3歳になっているはずだ」
須藤がそういった瞬間に、探索者達の足元から黒い煙が立ち込める。正確には周囲に生えている草からそれが出ているのだ。
そしてそれは次第に形を成していき、ティンダロスの猟犬が出現する。
その宇宙の邪悪さを集約したかのような不気味な存在を見てしまったことで正気度の喪失が起こる(1D3/1D20)
それから逃げ出すか撃退するかで無事にプロヴィデンスに着く事ができるだろう。
須藤の案内で当時のラブクラフトが住む屋敷にたどり着く。
侵入などすればそこには幼いラブクラフトが留守番をしているだろう。
時間が取れるのであれば母親などを出したりして、難易度を上げればいいたろう。
宝石商などに身分を偽れば取り入れることができるかもしれない。
ラブクラフトと探索者が見事に出会うことが出来れば、タイミングを見計らってKPはティンダロスの猟犬を登場させること。
ラブクラフト少年はこのティンダロスの猟犬を見たことにより病んでしまったのである。
それから逃げるなり誘拐するなり、撃退するなりした後は、そこに男が現れる。
男は自らをオーガスターレスと名乗る。
彼は「ラブクラフトに狂気を与えてくれてありがとう。これで世界に魅力的なトリックスターが誕生した」と笑う。
「明日またさっきの草原で会おうと彼はその場で文字通りに消えてしまう。」
探索者達は決断しなければいけない。
ここでルートが分岐する。
あらずじでも書いた、ラブクラフトを殺すか否かである。

★ 殺した場合

そこで探索者達は昏倒して気づけば部室で目が覚める。

自分達がタイムスリップした事実は周囲の人間から消えている。

ふと見ると三笠桃が本を読んでいる。

その本のタイトルは邪神の胎動というタイトルである。

中身を見て見るとそこにはアーカムオンラインというVRMMOPRGに挑むサークルメンバー達が描かれている。

急ぐ探索者達は眩暈を抑えながらページを捲っていくと最後にはラブクラフトを殺しているのだった。

桃は言う。

「その本面白いですね。まるで皆さんが物語の登場人物になったみたいでとても親近感が沸きます」

探索者達の視界はブラックアウトしていく。

★殺さない場合

次の日に草原でオーガストダーレスと出会う。

彼は探索者達に再度礼を言う。

「君達のおかげで彼の神話体系は本物になった。師からから弟子へ。夢から現へ。嘘から真へ。創作から神話へと昇華したのだ。さあ君達へ礼をせねばなるまいな」

彼はそう言うと傍らにニャラトテップを呼び出すと笑う。

「君達はこれが居ない世界を望んでいたのだろうか？ ならばこのような世界はどうだろうか。君達はこういうのが好きなのだろうか？」

そう言うとダーレスは指を鳴らす。

「はい、というわけで今回のシナリオはここで終了です」

と(KP名)は言った。

「お疲れ様です～」

(PC1.2.3名)はそう言った。

舞台を変えて君達の遊戯は続いていくことだろう。